

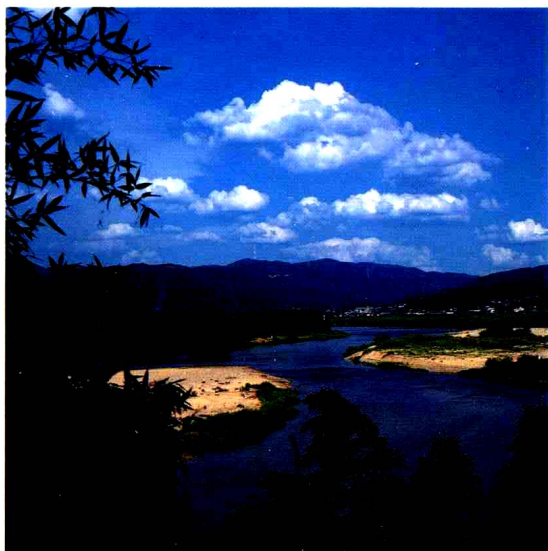
万葉の歌

7

人と風土

中西進企画

芳賀紀雄著



京都

保育社

人と風土

中西進企画

京都女子大学助教授 芳賀紀雄著

万葉の歌
7

京都

保育社

万葉の歌一人と風土⑦ 京都

昭和61年10月20日 印刷 定価 1,400円
昭和61年10月31日 発行

著 者 芳 賀 紀 雄
発 行 者 今 井 龍 雄
発 行 所 株式会社 保 育 社

〒540 大阪市東区上町1-17-13

電話 06-762-1731 (代)

振替口座 大阪 6-12346

〒170 東京都豊島区南大塚1-1-2

電話 03-944-3581 (代)

印刷/セブン印刷株式会社

用紙/日本加工製紙株式会社

王子製紙株式会社

© 1986 芳賀紀雄

落丁本・乱丁本はお取り
替えいたします

ISBN4-586-70007-6 C0392 ¥1400E

PRINTED IN JAPAN

(NDC 910.8)

はしがき

王朝の風情一色で染めあげられている京都にあつて、万葉集の歌は、いかにも存在感に乏しい。いわゆる古都とは、まったくゆかりのないところに、その歌声がたどられるからである。比較的まとまつた作品の残された宇治にしても、おおむね心に描く宇治の印象とは、よほどかけはなれていよう。ちなみに、京都府内で確認される万葉歌碑は、わずかに三例、まさに寥々たるものである。

そもそも、大和を主とする万葉集において、山背は、周辺としての意味しかもちえない。天平十二年恭仁京に遷都されるに至つて、にわかに関光を浴びたというものの、三年余の短命に終つた。山背には、古北陸道・古山陰道など、諸国に向かう主要な道路網が数かに膾炙している作品も、ほんの数首にとどまるだろう。万葉集を読むこと自体、ささやかな営みに属するが、本書では、一層ささやかな、周辺のな部分を取りあげた次第となる。

だが、それだけに、万葉集を愛する者にとっては、かえつていとおしみに似た感情がこみあげてくることを禁じえない。かつて、一国の中心地域であり、恭仁京も置かれた南山

背の地では、なだらかな山並と木津川の織りなす景観が、なおのどやかな古色を残している。恭仁京の大極殿址に立ち、あるいはゆったりとした木津川の流れを前にすると、茫々たる往時がしのばれ、遠い万葉集の歌が、不思議と身近なものに感じられる。人の気配の薄れた宇治川のほとりで、川波の行くえを追えば、ありし日の旅人の歌が、無性に懐しく、立ち去りがたい思いにとらわれてならない。

京都に移り住んで二十年あまり、この地への愛着は募る一方だが、本書の執筆中、自身もひとりの旅人に過ぎないというもどかしさを、いくたびか味わった。歌の解釈の困難な点もさることながら、この地で生まれ育った人のもつ、体臭と化した地理感覚に決して及ばぬ事実を、改めて思い知らされたのである。誤謬の多いことを秘かに惧れるが、御批正を仰ぎたい。そして、万葉集と京都に対する思いの深さのみを支えに、擱筆に漕ぎつけたともいえる本書から、志の一端なりとも汲んでいただければ、これにまさる幸いはない。

最後に、生来の遅筆のため、たいへんな御迷惑をかけたにもかかわらず、終始温情をもって激励を惜しまなかった保育社の方々、また本書を見事な写真で飾ってくださった小原直久氏に、あつくお礼申しあげる。私事にわたって恐縮ながら、亡き父の一周忌を期して刊行される本書の一部を、霊前に捧げることを宥恕されたい。



木津川の日の出 恭仁京付近

山並やまなみの

宜よろしき国と

川なみの

立ち合ふ里と

田辺たなべのさき福麻呂まろ歌集

(巻六一〇五〇より)



木津の野と恭仁京の山々

そらみつ

大和の国

あをによし

奈良山越えて……

(巻十三―三三六)



飯岡(田辺町)

春草を
はるくさ

馬咋山ゆ
くひやま

越え来なる

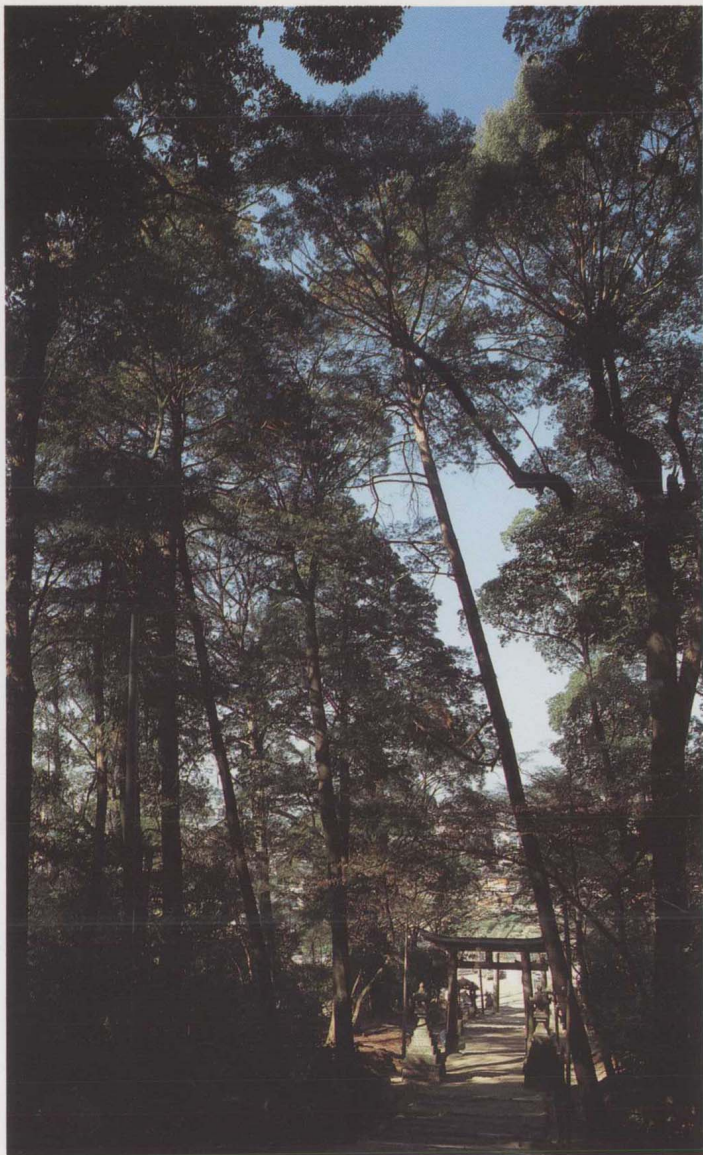
雁の使ひは

宿り過ぐなり

柿本人麻呂歌集
(卷九一七〇八)

早^{はや}来ても 見てましものを
山^{やましろ}背の
高^{たか}の槻^{つきむら}群
散りにけるかも

高市黒人（卷三―二七七）



多賀(井手町)の高神社 参道

山^{やま}背^{しろ}の

久^く世^せの社^{やしろ}の

草^{くさ}な手^た折^をりそ

我^わが時^{とき}と

立^たち栄^{さか}ゆとも

草^{くさ}な手^た折^をりそ

柿本人麻呂歌集（巻七―二八六）



久世神社（城陽市）



ものふの

八十^{やそ}宇^う治^ち川^{かは}の

網^あ代^{じろ}木^きに

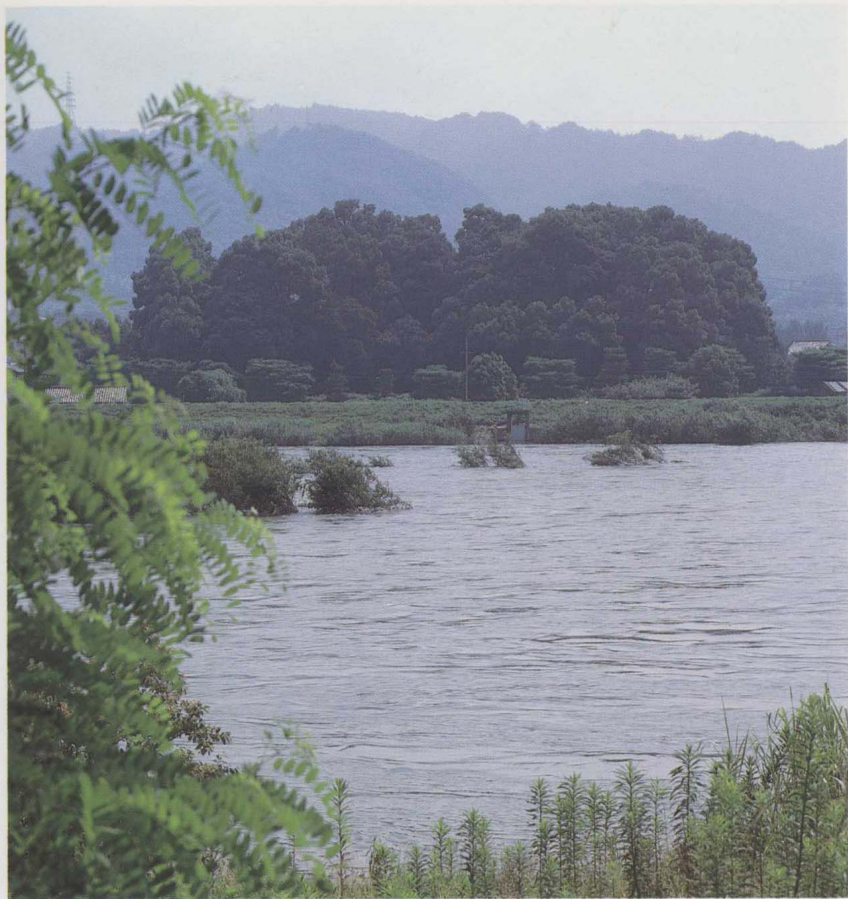
いさよふ波の

行くへ知らずも

柿本人麻呂（卷三―二六四）



宇治川



宇治若郎子の墓

妹^{いも}らが^がり

今^{いま}木^きの嶺^{みね}に

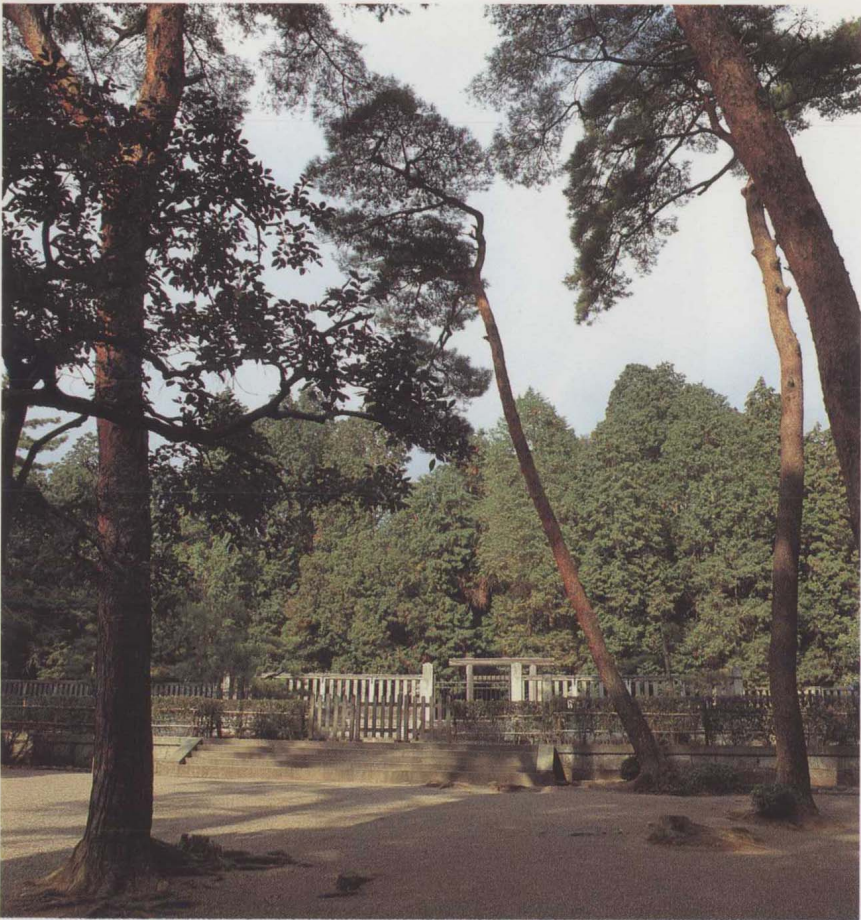
茂^もり立^たつ

夫^{つま}松^{まつ}の木^きは

古^{ふる}人^{ひと}見^みけ^けむ

柿本人麻呂歌集

(巻九—一七九五)



天智天皇山科陵

やすみしし

わご大君の
おほきみ

恐きや
かしこ

御陵仕ふる
みはつか

山科の
やましな

鏡の山に……
かがみ

額田王

(卷二―一五五)

……
水江の
浦島子が
鰐釣り
鯛釣り誇り
七日まで
家にも来ずて……

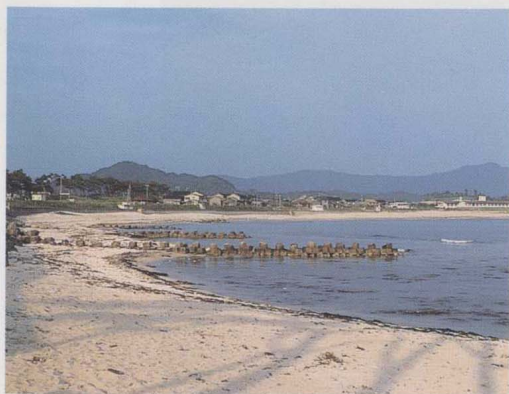
高橋虫麻呂歌集（巻九―一七四〇）



宇良神社（伊根町）



島兒神社(網野町)



網野海岸

今造る
久^く邇^にの都は
山川^{やまかは}の
さやけき見れば
うべ知らすらし

大伴家持（卷六一〇三七）

海住山寺道より瓶原・恭仁京址・木津川を望む